

2016年
11月1日(火)―
12月23日(金・祝)
東京国立博物館
東洋館8室[上野公園]

休館日：月曜日
開館時間：午前9時30分―午後5時
*金・土曜日、11月3日(木・祝)は午後8時まで開館。
*入館は閉館の30分前まで。

主催：東京国立博物館、読売新聞社
企画協力：謙慎書道会



篆
てんこく
刻
の
軌
跡

小
林
斗
盦

生誕百年記念

とあん

PRESS RELEASE

THE CENTENNIAL RETROSPECTIVE OF
KOBAYASHI TOAN:
HIS SEAL CARVING AND COLLECTION OF CHINESE ART

－展覧会の概要・見どころ－

小林斗こばやしと あん盒(1916～2007)は祖父の代より印章業を営む家庭に生まれ、10歳の頃に父から手ほどぎを受け、篆刻てんこくに親しみました。その後、比田井天来ひだいてんらい いし い そうせき、石井雙石かわい せんろ にしかわやすし、河井荃廬、西川寧といった明治から昭和にかけて活躍した書・篆刻の名手に教えを乞いながら、一貫して古典と向き合い続けます。更に文字学や漢籍いんがく、印学いんがくといった篆刻に不可欠な学問を加藤常賢かとうじょうけん おおた も あん、太田夢庵こいんに学び、中国の古印・書画の研究に没頭するとともに、幅広い作品を世に発表しました。書壇の重鎮として長らく篆刻界を牽引し続け、88歳の時にはその功績が称えられ、篆刻家として初めて文化勲章を受章します。91歳の生涯を閉じるまで、知性に裏付けられ、洗練を極めた作品を

数多く残しました。

平成28年(2016)は、小林斗盒の生誕100年にあたります。本展は小林斗盒の篆刻・書画や、旧蔵になる中国の書画いんぶや印譜などを展示し、91歳の天寿を全うした小林斗盒の偉大な業績を回顧します。代表作「柔遠能邇」白文円印をはじめ、「愚者之定物以疑決疑」朱文印や「独往」朱文印など斗盒の制作した篆刻の名品に加えて、「異耳」朱文印ちようしけん、趙之謙筆「隸書張衡靈憲四屏」、吳熙載筆「梅花図軸」ごきさいなどかつて斗盒が所蔵し、学んだ璽印じいんや中国書画の優品が一堂に会します。是非この機会に、斗盒が生涯をかけて取り組んだ「方寸の世界」をご堪能下さい。

－開催概要－

名 称 : 生誕百年記念 小林斗盒 篆刻の軌跡—印の世界と中国書画コレクション—
The Centennial Retrospective of Kobayashi Toan: His Seal Carving and Collection of Chinese Art

会 期 : 平成28年(2016)11月1日(火)～12月23日(金・祝)
前期展示:11月1日(火)～11月27日(日) 後期展示:11月29日(火)～12月23日(金・祝)

会 場 : 東京国立博物館 東洋館8室 〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9

休 館 日 : 月曜日

開 館 時 間 : 午前9時30分～午後5時 *金・土曜日、11月3日(木・祝)は午後8時まで開館。 *入館は閉館の30分前まで。

観 覧 料 : 総合文化展料金でご覧いただけます。 一般620円(520円)、大学生410円(310円)

*()内は20名以上の団体料金。 *高校生以下および満18歳未満、満70歳以上の方は無料です。入館の際に年齢のわかるもの(生徒手帳、健康保険証、運転免許証など)をご提示ください。 *障がい者とその介護者1名は無料です。入館の際に障がい者手帳などをご提示ください。

お 問 合 せ : 03-5777-8600(ハローダイヤル)

ホ ー ム ペ ー ジ : <http://www.tnm.jp/>

交 通 : JR上野駅公園口、鶯谷駅南口より徒歩10分

東京メトロ銀座線・日比谷線 上野駅、東京メトロ千代田線 根津駅、京成電鉄京成上野駅より徒歩15分 ※駐車場はありません

主 催 : 東京国立博物館、読売新聞社

企 画 協 力 : 謙慎書道会

関 連 事 業 : **月例講演会** **「小林斗盒の篆刻の世界」**

日時:11月19日(土)13:30～15:00(13:00開場予定)

講師:孫慰祖(上海博物館研究員)

会場:東京国立博物館 平成館大講堂

定員:380名(当日受付・先着順)、聴講無料(ただし当日の入館料が必要)

ワークショップ **「篆刻体験 自分だけの印をつくらう！」**

日時:11月26日(土)①10:30～12:00 ②14:00～15:30

参加費:無料

会場:東京国立博物館 本館地下 みどりのライオン(教育普及スペース)

*ただし高校生を除く18歳未満の方は当日の入館料が必要

講師:岩村節廬(読売書法会常任理事、謙慎書道会常任理事)

協力:謙慎書道会

河西樸堂(読売書法会常任理事、謙慎書道会常任理事)

申込方法:当館ウェブサイトのフォームでお申込ください

対象:①小学生とその保護者 ②高校生以上

申込締切:①②いずれも11月10日(木)必着

定員:①10組 ②20名(応募者多数の場合は抽選)

—小林斗盦について—

川越に生まれた小林斗盦(1916～2007)は、15歳で書を比田井天来に、篆刻を石井雙石に師事。さらに25歳で篆刻を河井荃廬に、29歳で書を西川寧に師事して、日本人の感性に本格的な中国の技法を盛り込みます。鋭い刀法を駆使した緻密な作風によって、34歳の若さで日展の特選を受賞してからは、常に書壇の重鎮として篆刻界を牽引し続けました。

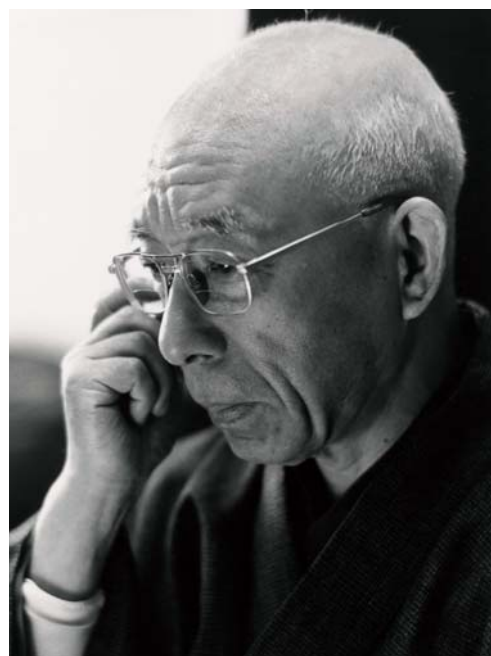
一方、33歳で文字学と漢籍を加藤常賢に、37歳で印学を太田夢庵に学んで、中国の古印や書画の研究に没頭し、多くの論考を発表、『中国篆刻叢刊』全40巻(二玄社、1981～84)、『中国璽印類編』

(二玄社、1996)、『篆刻全集』全10巻(二玄社、2001)などを上梓しました。篆刻を志すには、文字学・印学をはじめ、広く中国の書の歴史に精通しなければならないと主張し、終生にわたってその持論を貫いて、中国書画や印譜の収蔵家としても知られていました。

知性に裏付けられ、洗練を極めた斗盦の作風は、広く江湖の喝采を博し、公印として用いられるものや、文壇・芸苑の著名人の所用となるものが少なくありません。実作と研究における優れた業績によって、77歳で日本芸術院会員となり、82歳で文化功労者、88歳の時には篆刻家として初めて文化勲章を受章しました。

—略歴—

大正 5年(1916)	0歳	2月23日、埼玉県川越市に生まれる。本名、庸浩。
昭和 6年(1931)	15歳	書を比田井天来に、篆刻を石井雙石に師事。
昭和16年(1941)	25歳	河井荃廬に師事。
昭和20年(1945)	29歳	西川寧に師事。
昭和24年(1949)	33歳	文字学・漢籍を加藤常賢に師事。
昭和28年(1953)	37歳	中国古印学を太田夢庵に師事。
昭和38年(1963)	47歳	日展会員。
昭和51年(1976)	60歳	第8回日展文部大臣賞受賞。
昭和56年(1981)	65歳	西泠印社名誉社員。
昭和59年(1984)	68歳	第40回恩賜賞・日本芸術院賞受賞。
昭和60年(1985)	69歳	日展理事、西泠印社名誉理事。
平成 2年(1990)	74歳	勲三等瑞宝章受章。
平成 5年(1993)	77歳	日展常務理事、日本芸術院会員。
平成 8年(1996)	80歳	日展顧問。
平成10年(1998)	82歳	文化功労者顕彰。
平成12年(2000)	84歳	上海図書館にて「小林斗盦篆刻書法展」を開催。上海図書館学術特別顧問。
平成15年(2003)	87歳	西泠印社名誉副社長。翌年にかけて東京国立博物館へ稀覯印譜・篆刻資料、計423件を寄贈。
平成16年(2004)	88歳	文化勲章受章。
平成19年(2007)	91歳	8月13日逝去。享年91。従三位を賜与される。



作品の魅力

- 徹底した古典研究に基づく理知的で幅広い作風
- 緻密な印面構成と大胆かつ鋭い刀法
- 点画と縁が醸す深遠な味わい

篆刻とは？

木や石などの印材に、姓名や雅号などを彫ることを、篆刻といいます。古代の中国では、秦漢の頃から、官印や私印を作り、役職や個人の証明に使われました。北宋の頃から印に対する関心が高まり、元以降になると芸術としての篆刻が目立つようになり、書画の制作には欠くことのできない存在となりました。官私の証明とともに、芸術の一つとして、中国の篆刻は東アジア地域に広く浸透し、現代社会においても重要な役割を果たしています。

展覧会の構成

プロローグ	篆刻家 小林斗盦
第1部	古典との対峙
第2部	作風の軌跡
第3部	篆刻コレクション

本展は篆刻家・小林斗盦の生涯における記念碑的な作品で幕を開けます。91年の生涯において、斗盦は実に幅広い作風の篆刻作品を残しました。その背景には、斗盦自身の言葉を借りれば、「古典を尊重模倣し、近世の名人の作品を分析咀嚼して、完璧を期す」という頑なまでに守旧的な制作観があります。こうして養われる客観性こそが高度な芸術を生むために必要であるという信条は、斗盦を生涯にわたり篆刻とその前提となる文字や書の歴史的遺物に向かわせ続け、多様な作品群を生むことになりました。第1部では、背景にある古典を対照させて斗盦の幅広い作風を概観します。続く第2部では、斗盦の篆刻作品を年代順にたどり、作風の軌跡を窺います。

晩年まで衰えることなく数々の名品を生み出し続けた小林斗盦は、東京にある高層マンションの一室に居を構え、そこを制作の場としました。自ら懐玉印室^{かいぎょくいんしつ}と名づけた斗盦の書齋は、篆刻という芸術を表すかのように、決して広いとは言えない空間でありながら、そこから無限の創造が紡ぎだされたのです。第4部では、生前に斗盦が愛用した文房具や、書齋を彩った文雅な扁額など、「懐玉印室」

第4部	制作の風景
第5部	中国書画コレクション
第6部	翰墨の縁
エピローグ	刻印の行方

での制作風景を眺めてみます。

斗盦は古典研究のかたわら、自ら璽印^{じいん}や印譜、中国書画の蒐集にも努め、周辺分野の所産を直に触れて、常に篆刻という文化を見つめ続けました。時に旧蔵者との親密な交流を背景として入手に至ったそのコレクションには、篆刻書画いずれにおいても名品が少なくありません。第3部・第5部では、その貴重なコレクションの一端をご紹介します。

篆刻家の作品には、ただ芸術表現に終始したものだけではなく、往々にして実用を意識して制作されたものがあります。斗盦の篆刻作品にも依頼や応酬によるものが多く含まれ、相手や用途に応じた作風が見られるとともに、政界・学界・文壇・芸苑など各界の著名人との交流や斗盦作品の評価の高さが垣間見られます。第6部では、それらの作から斗盦が生涯に結んだ翰墨の縁を窺います。

人手に渡った刻印^{こくいん}は、篆刻家の意図から離れ、所蔵者がつくる新たな場を舞台^{いんえい}に、印影として様々な表情を見せます。例えば書作品に押された印影はどのようなのでしょうか。本展の結びに、篆刻家・小林斗盦が残した刻印の行方を眺めてみましょう。

— 主な作品解説 —

プロローグ	篆刻家 小林斗盦
-------	----------

とおきをやわらげちかきをよくす

「柔遠能邇」白文円印

小林斗盦刻 昭和58年(1983) 原印:東京・日本芸術院蔵、印影:個人蔵

第15回日展に出品したこの作品で、小林斗盦は第40回恩賜賞・日本芸術院賞を受賞しました。67歳の刻です。斗盦の生涯と篆刻を語るうえで、記念碑的な作品と言えます。側款にあるように、この言葉は『尚書』堯典の一節に依拠したものといい、『詩経』民勞ほかにも見え、「遠くの民を安んじ近くの民をよくする」などという意味。絵画的要素の強い西周時代から春秋戦国時代頃の金文をもとにして、動的で表情豊かな造形をしています。



とくおう

「独往」朱文印

小林斗盦刻 平成11年(1999) 原印:個人蔵、印影:個人蔵

「ただひとりで行く」という意味のこの二字句を、小林斗盦は刻風を変えて、幾度となく制作を試みています。第31回日展に出品した本作品は金文を基調としたもの。「蜀」(独=獨の旁)の形は西周時代早期の金文や殷時代の甲骨文にみられる図象性を強調し、「彘」は戦国時代の古璽の形をアレンジ、「往」は戦国時代の金文の形につくっています。古代中国の各時代の字形の長所を融会して、ひとつの秩序を作りだしており、斗盦の金文表現の到達点を示す作と言えます。

ふひんゆう

参考作品 婦鬪卣

西周時代・前10世紀 東京・台東区立書道博物館蔵

中国古代の祭祀に用いられた青銅器で、これは香料入りの酒を入れるための卣という器です。鬪家の女性が、嫁ぎ先の姑のために制作しました。銘文が蓋の裏と器の内底に鑄込まれており、このような青銅器などの金属製品に見られる銘文を金文といいます。西周時代を中心とする金文は、殷時代の甲骨文とともに、原始的とも言える、漢字の古い字姿を示しています。



ぐしゃのものをさだむるやぎをもってぎをけつす

「愚者之定物以疑決疑」朱文印

小林斗盦刻 昭和62年(1987) 原印:個人蔵、印影:個人蔵

『荀子』解蔽の語を小篆で刻した作品で、側款に見えるように趙之謙の刻風に倣ったもの。小林斗盦はこのような趙之謙風の緻密な構成の多字印を得意としました。本作でも、1辺3cm余りの小さな印面に、3行合計9字が手足を伸ばしたかのような躍動感のある字形で、窮屈さを微塵も感じさせずに布置されています。第32回現代書道二十人展(1988)の出品作。



いじ

「異耳」朱文印

戦国時代・前4世紀頃 原印:個人蔵

戦国時代の銅製の古璽で、壇状の鈕式(つまみ)を備えます。かつて小林斗盦は「現存の私璽として、鈕形印面とも最高の鑄造技術を示す名印」と評しました。羅振玉の旧蔵品で、林朗庵の手を経て小林斗盦の所蔵となりました。羅振玉編「赫蓮泉館古印存」(東京国立博物館蔵、小林斗盦寄贈印譜)の巻頭を飾る1点です。



ぎょうしよかいぎょくいんしつへんがく

行書「懷玉印室」扁額 【前期展示】

さもうかい
沙孟海筆 中華人民共和国・1988年 個人蔵

懷玉印室とは小林斗盒の室号。生前、太田夢庵所蔵の玉印8顆を譲り受けて宝蔵した斗盒は、『老子』の「被褐懷玉」を援用して自ら室号を名付けます。西冷印社社長を務めた沙孟海によるこの扁額は、斗盒にとって、敬愛していた沙孟海との厚誼を記念する特別な意味をもった作品でした。生前、自ら「永く宝愛したい」と記した本作品は、斗盒篆刻が生まれる懷玉印室という空間、また現代における日中書壇の親密な交流状況をも象徴するものと言えます。

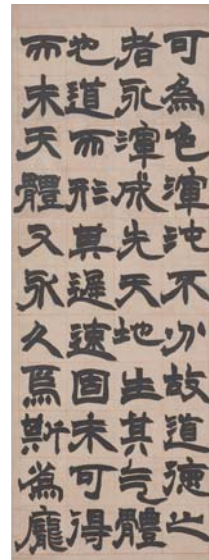
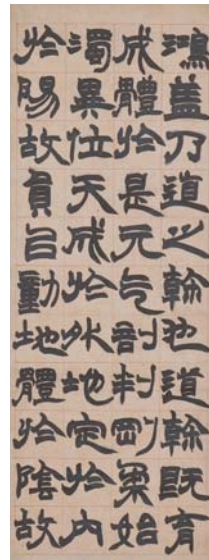
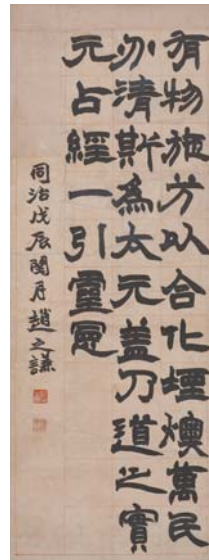


れいしよちょうこうれいけんしへい

隸書張衡靈憲四屏 【後期展示】

ちようしけん
趙之謙筆 清時代・同治7年(1868) 個人蔵

金石銘文の書を学ぶ碑学派のなかでも、趙之謙はとうせきじよ ごきさい
鄧石如、呉熙載と並ぶ代表的な人物です。およそ篆刻、
絵画、書の順に独特の作風を形成し、書においては
ほくぎしよ
「北魏書」という新風の表現を確立しました。本作品
は、占星術に関する著述を整理した瞿曇悉達『開元占
経』に引かれる張衡「靈憲」を、隸書で書いたもの。いわ
ゆる「逆入平出」という独特の筆法を駆使したもので、
趙之謙の書の様式を考えるうえで重要視されています。
昭和11,12年頃に晩翠軒を介して日本にもたらされ
ばんすいけん
と言われ、田中竹禅所蔵時には趙之謙没後60年を記
念した日本で初の作品展「趙撫叔先生遺作展覧会」
ちようきしゆく
(東京美術会館、1942)に出品。後に小林斗盒の所蔵と
なり、斗盒自身も作品収集に奔走した「逝世百年趙之謙
記念展」(東京美術倶楽部、1985)に出品されました。



ばいかずじく

梅花図軸

ごきさい
呉熙載筆 清時代・咸豐11年(1861) 個人蔵

清時代の碑学派のひとりで、書画篆刻いづれにも秀でた呉熙載(字は讓之^{じょうし})による梅花図です。昭和53年5月、斗盒が所属した謙慎書道会は上野の森美術館を会場に、呉讓之の展を開催し、同年10月に図録『呉讓之の書画篆刻』(二玄社)を上梓しました。同展において展示構成に尽力した斗盒は、本作品を図録のカバーデザイン並びに巻頭カラーの1点として使用しました。巻末「呉讓之の芸術」で自ら、本作品がもと四屏の一であること、また師の河井荃廬から譲り受け、そのため東京大空襲による焼失を免れたことを記しています。「ゆったりとした運筆、高雅な設色、凛とした気韻がある」と評した呉熙載の花弁画のなかでも、とりわけ思い入れのある作品だったのでしょうか。



かふうさんじん

「荷風散人」朱文印【前期展示】

小林斗盦刻 昭和24年(1949) 印影:個人蔵

小林斗盦が小説家の永井荷風に贈った朱文による字号印です。当時、斗盦は33歳、対して荷風は70歳でした。荷風はこの刻贈印を受け取った翌日、孫ほどの年齢差のある斗盦へ律儀に礼状をしたためます。「戦災にて文房具一切皆無くなり不便甚だしく困」っていた荷風にとって、斗盦からの刻贈は「一層有難く感謝」の念を綴っています。斗盦は手控えに残した印影の下に、この礼状を貼り込み、生涯大切に保管しました。師である河井荃廬の清らかで精緻な作風に通じる若き日の一作です。



エピローグ

刻印の行方

てんしよきようちゆうきゆうがくがく

篆書「胸中丘壑」額

あおやまさん う
青山杉雨筆 昭和62年(1987) 東京国立博物館蔵

ぶんちようじゆ

「文長寿」白文印

小林斗盦刻 昭和59年(1984) 原印:個人蔵、印影:個人蔵

青山杉雨は30歳の頃に西川寧^{やすし}に師事して、昭和から平成初めにかけて書道界の発展に大きく寄与し、平成4年(1992)には書で文化勲章を受章した人物。杉雨はこの作品に、同じ西川門の小林斗盦の刻印3顆、^{どういのしよ}「東夷之書」朱文印(引首)、「文長寿」白文印(落款)、「鬻齋^{ごうさい}」朱文印(押脚)を使用しています。印癖家としても知られた杉雨の所用印は数多く、なかでも斗盦の作は30余種を数えました。書作品に押された印影は、筆者のサインであるに留まらず、書を効果的に引き立て、作品を影ながら支える存在と言え、そこには筆者の好尚が反映されます。篆刻家の没後もなお、その刻印は所蔵者に押され、また新たな一面を見せることとなります。

